

---

# ワインが似合うこの夜に・・・

ARIKA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ワインが似合うこの夜に・・・

### 【Nコード】

N5150A

### 【作者名】

ARIKA

### 【あらすじ】

人には暗い過去があるもの。元気なあの人にも悩みがある。こんな日にはワインを飲もう。白ではなく赤を。。。

(上) (前書き)

上下巻からなる短編小説です。  
これと併せて「中立国家の私」もお願いいたします。

(上)

今日の仕事も終わり、一杯引つ掛けて帰りたい気分だった。

しかし、会社に残っていたのは数名だけでその中でも仲の良い同僚は一人しかいなかった。迷わずにその仲の良い同僚の北野に声をかけた。

「どうだ？ 仕事も終わったし、居酒屋にでもいかないか」

「おー、いいな。でも、悪いけど今日は結婚記念日なんだよ」と言つて身支度を手早くしている。

「おお、そうか。三周年目だったか？」

「四年目だよ。たのむよ、それくらいは憶えといてくれよ結婚式にも招待したんだから。じゃ、お先お疲れ」そういつてにこやかにそくさと帰ってしまった。

北野の嫁さんはポツチャリとしていて中々愛嬌のある人だ。結婚式の時を除くと、二三回しか顔を合わせた事が無いので記憶はあやふやだがそんな印象だ。最近はおっぱら子供が欲しい、欲しいと言っている。

癖で顎に蓄えた無精ひげを触る。今年で二十代後半に差し掛かる。最近では体に締りがなくなってきたて困っている。数年前まではこんなことでは疲れなかったことでも疲れてしまったりすると、時の流れを感じずにはられない。

今日は居酒屋を諦めて帰ろうと思い、自分のデスクに行き身支度をしていると河本部長が俺のデスクに来た。

「どうだい吉田君。私と一緒に居酒屋にでも行かないかい？」

「え？ 僕とですか」

「どうやら北野君に振られてしまった様だしね」と人懐っこく笑った。

「あれ？ お話し聞かれましたか？ 部長さえ良かったら一緒に行きましょう」

「よし、じゃあ決まりだな。行こうか」

河本部長はすごく感じの良い部長で、平社員からもめつぼう評判の良い部長だ。年齢はなかなか良い年で、四十そこいらだった筈だ。指に指輪がはまっていなところを見ると独身なのだろう。

会社の前でタクシーを拾い、駅前繁华街まで行く。

駅のそばの四階建てのビルの二階にある居酒屋に入る。ライトで照らされた薄暗い店内には、スーツを着たサラリーマンが多かった。「とりあえず、生中二丁ね」席に着くなり真つ先に頼む。大学生時代に居酒屋でバイトしていた頃には、こんなことを言うサラリーマンを「おやじくさい」と思っていたが、こんなにも早くそれに届くとは思ひもなかった。

「部長なに食べますか？」

二つのメニューの内の一つを渡すが「いや、私は良いよ。吉田君が適当に頼んでくれ」と、つつかえされてしまった。

「あれ？ あんまりお腹お空きじゃないですか？」

差し出したメニューを引っ込めて自分の目の前に広げる。

「うん。今日はちよつとね」

生中を定員が持つて来た時に適当に料理を注文して、とりあえず生中で乾杯する。バイトの先輩に誘われて飲んでいた高校時代は、ビールのなかが旨いのか理解ができず、カクテルばかり飲んでいた。しかし、今では逆にカクテルなんて甘過ぎて飲めたものではない。

「今日は、北野君はなにかあったのかい」グイと一気に半分まで減らしたジョッキを机に置いて言った。

「なんか、結婚記念日とかで。あれ？ そういえば、部長は出席なさらなかったんですよね」

「ちよつと用事があってね」ジョッキを持ち上げ、ビールを一口煽る。

「へー。部長は結婚してないんですか？」

「ああ、この通りね」と言つて机に着いていた手をあげてひらひらと振つた。「この先にする予定もない」と付け加えた

そして、またビールを一口煽る。なにか忌まわしいものを打ち消すように。

「ちよつとかつこよく言つと独身貴族つてやつですか」とちよつとふざけた感じで言つと「そんな大層なもんじゃないよ」と鼻で笑い「君は彼女とか居ないのかい？」と言葉を繋いだ。

「全くですね」と皮肉んで笑つた。

そこから少しの空白が訪れ、部長が一口にジョッキの中身を空にして部長が口を開いた。

「ちよつと昔話をしてもいいかな？」

「え？ なんですか急に」

「ちよいと苦々しい若い頃の恋の話だよ」唇の端をクイとあげて微笑んだ。

その時、二十代そこいらの定員がちよつと料理を運んで来た。部長のジョッキは空で、俺のジョッキも空に近かつたので生中を追加で二丁頼んだのだが、「私は赤ワインを頂くよ」と部長は言った。

「部長。なかなか渋いですね」

「渋い・・・か」と言つてお通しの枝豆を一つ手に取る。「私が、丁度いま料理を運んできた定員さん位の年頃のころの話なんだがね」と、話し出した。

「ええ」

部長の若い頃と言つと、一九八〇年半ば位だろう。日本はバブルが訪れた時期で、日本は今とは違い、色めき立っていた。その頃大學生だった河本部長も、他の大学生も夢と希望み満ち溢れていた。

今でさえ耳に馴染んでいる言葉だが、その頃「合コン」と言う言葉の知名度は昇り調子にあつたがまだまだ知名度は薄い時代であり、部長がその女性に出会つたのも「合コン」なんて物ではなくただの

男女の集まりであった。

ある夜に高校時代の友人が「一緒に酒でも飲まないか？」と電話が入った。夜もなかなか良い時間で電車もいしたがた終電が出発した時刻だった。なので、メンバーによつては断るつもりで「誰といるんだよ」と尋ねると、どうやら大学の女生徒達と一緒にだったらしい。

その頃は「ホットドッグプレス」という雑誌に掲載されているデパートマニュアルを読み、若い男女はシティーホテルで性行為に勤んでいる時代であった。当然部長も男であるので、弱い強いは抜きに欲求はあった。なので、そんなおいしい話を盛りの付いた大学生が見逃す筈も無く、隣町までの片道二、三十分の道のりを自転車で大急ぎで友人宅に向かったらしい。

その友人の家は両親が離婚してしまっていて、父親にも母親にも愛人が居たのでどちらにも付く気はなかった。その旨を父親に話すと部屋を一つ借りてくれたらしい。そんなわけで高校時代は集まっては徹夜で麻雀を良くやったらしい。

そして、その友人の家に居た数人に女生徒の内の一人に一目惚れをしてしまったらしい。その頃には携帯電話はもちろんポケットベルさえも無かった。なので、今みたいに「出会い」から「交際」への発展は容易ではなかった。かなりの度胸と自信のある男はその場で家の電話番号を交換したりもするのだが、部長はそこまで肝の据わった人間ではなかった。しかし、さり気なくと言うか抜け目無くというか、しつかり隣の席は確保したらしい。

結局、その夜には何の発展もなく終わってしまったのだが、その数ヶ月後に再びチャンスが訪れた。いや、正確には作ったと言う表現が正しいだろう。

悩んだ末、その友人にあの時の子に惚れたことを告げると「そんなじゃ、また誘って飲もうぜ」と言ってくれた。その友人は高校時代から決断から行動がすごく早く、電話をした週の土曜日には開いてくれた。

その友人の話しでは彼女も部長のことを気に入っていたらしい。  
そして、その夜の帰り道に勇気を振り絞って連絡先を教えてください。  
た。

(下)(前書き)

これでお終いです。じっくり楽しんでください。  
できたら、評価などいただければ嬉しいです。  
あと「中立国家の私」もご一読を。。

(下)

さっきの店員と同じ店員がワインとグラスを持ってきた。

「え？　ここから苦々しい話になってくんですか」

グラスに赤ワインを静かに注ぎいれる部長に尋ねる。

「この話しには白ワインじゃなく赤ワインが良く似合う。白では甘すぎる。皮ごと熟成した、苦味の奥に甘味がある赤ワインが良く似合う。その彼女が同じことを言ってたんだけどね」と赤々としたワインを見つめながら言った。

「ところで吉田君はプラトンという人を知ってるかい？」ワインから目を離し部長が言った。

「名前だけでしたら。哲学者でしたよね？」

「そうだ。イデア論を主に展開した哲学者。プラトニッククラブって言葉は知ってるかい？」

「肉体的な愛じゃなく、精神的な愛を求める恋愛……ですかね？」

「そんな感じかな。要は欲情を伴わない純な恋のことだ。この考えはプラトンから発祥してるんだよ」

「へーそうなんですか」

こんな話を聞いていると、河本部長はうちの会社じゃなくもっと別に似合う仕事がある気がする。

部長がしたプラトンの話に精通する。

その彼女は大学で哲学を専攻していて、その中でもプラトンを特に尊敬していたらしくしきりにプラトニッククラブについて語っていたらしい。

電話番号を聞いた日から交流は深まり、動物園。遊園地。美術館。と、数回のデートを重ねた。五回目のデートでやっと部長は告白を

した。答えはもちろんオーケーだった。

が、付き合いだして三カ月後の三年生の春に彼女はアメリカに半年間の留学に行ってしまった。

初めの一ヶ月は胸を何か締め付ける感覚と、激しい焦燥感が押し寄せた。生きているのに会えないのならばいつそのこと死んでしまつてくれたほうが諦めがついて良いと思う夜もあった。

「死んでしまったことが悲しいのか、会えなくなつてしまつのが悲しいのか」

人が死んだときに泣く理由を考えたときどつちの理由が正しいのか？ こんなことを考える夜もあった。もちろん、両方という理由が正しい。しかし仮に一方しか選べないとしたら？ そして、会えなくなるのが悲しくて泣くのならば、会いたくても会えないこの状況は同じ悲しみに打ちひしがれていることになる。そう考えて更に泣いた。

しかし、二ヶ月目には大分落ち着き、三ヶ月目には完全に吹っ飛んだ。理由は新しい彼女ができたからだ。

その彼女はセックスもやらせてくれるし言うことは無かったが二ヶ月で別れてしまった。

理由は単純に、アメリカに留学している彼女の帰りが近付くと再び焦燥感がぶり返してきたのだ。焦燥感だけでなく今度は、留学中に新しい女を作ってしまったことへの罪悪感にも胸を押しつぶされそうになり、満月に向かって懺悔する夜もあったらしい。

そして、彼女は無事帰国した。肌をこんがり焼き、半年前よりもグラマラスになっていた。

帰国してから初めて会つたのは三日後の土曜日だった。帰国中に犯してしまった自分の罪への穴埋めも含め、少し背伸びをした。遊園地に行った後に、ふんぱつしてフランス料理屋に行ったのだった。その頃フランス料理店に行く男はかっこいいという風潮があった。

彼女のアメリカ留学についての感想を主に話しながらフレンチを食べた。

「フレンチ食べてるのにアメリカの話なんかおかしいね」と共に笑ったらしい。

そのフランス料理屋で「赤ワインが苦手なんだよ」と部長が言う。彼女は「人生には白ワインじゃなくて赤ワインが良く似合う。白では甘すぎる。皮ごと熟成した、苦味の奥に甘味がある赤ワインが良く似合う」と言ったその言葉が今でも耳に響いているらしい。

因果応報という言葉がある。どんなに罪滅ぼしをしたところで落ちるべき裁きは落ちる。

その頃、その町の近辺では通り魔が横行していた。

人間は幸せなことばかりを考えて不幸なことからは目を逸らす。不幸について考えたとしても、自分の許容範囲でのみだ。

時間は夜の十時位だったらしい。夏が過ぎ、冬の装いを帯び始めた公園のベンチに座って談話をしていたのだが、その日は風も強く寒かったので公園の向かいにある自動販売機に缶コーヒーを一人で買いに行ったららしい。

自動販売機に百円を入れて缶コーヒーを買ったのだが、出てこない。きつと詰まってるのだろうと思っただけで蹴っ飛ばしたが出てこない。諦めて、少し遠くにある自動販売機に行った。

その時、強い風が吹いた。ビューという風の中で確かに悲鳴を聞いたらしいのだが、はつきりと彼女だとは断定できなかったらしい。缶コーヒーを両手に持って公園に戻ってきたのだが、彼女がベンチに横たわっている。

「まさかな」と思って側まで近寄り、体を揺すって起こすときにやっとその異様さに気が付いた。手に水とは違うぬめり気のある液体がへばり付いた。その時ははつきりと顔から血の気を引くのを感じたらしい。

無理やり起こすと、腹部が真っ赤に染まっていた。その光景を見て部長は完全に気が動転してしまっていたらしい。

救急車を呼ぶにも携帯電話も普及どころか存在すらしてない時代だ。真っ白な頭でがむしゃらに走り、公衆電話を探した。しかし、

物は探しているときに限って見つからないものだ。脳の裏側でさつき彼女が吐き出した言葉がフラッシュバックする。

公衆電話が見つからず、疲れて立ち止まったときに気が付いた。何も、探さなくても民家の人間によんでもらえば良いのだ。適当な民家のインターフォンを真つ赤に染まった指で押す。

支離滅裂の言葉でもなんとか理解してくれたらしく、その十分後に救急車が来た。それに遅れて、パトカーが来た。

救急車を呼ぶのが遅くなったこと、土曜日の夜と言うこともあり受け入れられる病院が遠かったこと。色々な不運が重なり、結局は最悪のパターンになってしまったらしい。

死亡したのを聞いた夜に、死んでしまうのと、合えなくなるのは背負い込まなければならぬ悲しみの形も、色も、重さも、まるで違うのだということが分かったらしい。

「その命日が今日ですか？」三杯目のビールを握りながら聞いた。

「そうだ」

部長は二本目のワインをグラスに注ぐ。

「今でも罪悪感を引きずって、結婚できないんだよ」そう言って皮肉んで笑った。

「そんな。部長は何にも悪くないですよ。運命だったんですよ」

「彼女の両親もそう言ってくれたよ。良い両親だったよ。一人娘だったのに」

グラスに注いだワインを一息にグイと煽る。

「それ以来ね。命日の日には必ず線香をあげに言って。毎回謝ってたんだよ」

「今日は？」

部長はグラスにワインを注ぎながら、口で答える代わりに首を横に振って答えた。

「何故ですか？」

「きっと私は「あなたのせいじゃないですよ」と言ってもらいたくて謝ってたんだ。そんなこと思ったら急に行きたくなくなっちゃってね」と苦笑いをした。

再び沈黙が流れた。

「あの」と、俺が先に口を開いた。

「なんで、俺なんかにこんな話を？」

部長は、フツと微笑み「俺も今年で移動なんだよ」と言った。

「はあ」と相槌を打つ。

「だから、良いかなくて。それに」

「それに？」

「同じなんだよ。名前が吉田だったんだよ彼女」

そういつて微笑み、グラスに入ったワインを再びグイと煽る。

「やっぱり、俺には赤ワインは苦すぎるよ」と言って泣いてるような笑ってるような表情を浮かべた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5150a/>

---

ワインが似合うこの夜に・・・

2010年10月8日15時06分発行